文化が花開く都市

01 問題提起

現在、「都市」と呼ばれる場では、急速な交通整備が進み、
生活の中で利便性が向上したことで都市はより一層、
住みやすい場所へと変化を遂げている。

一方で利便性を追求するがゆえに、文化が損なわれている。
2050年の小倉のまちづくりビジョンは他の都市のまちづくりビジョンと変わらない
「個性のない」都市づくりが展開されていた。

「小倉らしさ」とは、文化や歴史の中から紐解き、考えていく必要性がある。
そこで我々は、小倉という敷地が持つ歴史と文化を用いた
「個性ある都市」としての提案を考案した。

02 背景

小倉には「小倉城」を中心として、様々な城下町文化が形成された。
紫川に歴史の軸を集約する形で文化を取り込んだ場の形成を考えた。

小倉を代表する文化として、
参勤交代の時代には長崎街道を中心として栄えた宿町の歴史がある。
また、築城則子氏によって復元された「小倉織」はかつて小倉の特産品であった。

以上のことから、小倉を形成する要素として「宿町」と「小倉織」と多用する
建築空間を考えた。

都市化により損なわれていった文化を再生し、活性化させるプランである。

03 造形の形成について

敷地の中心を流れる紫川には、今までの積み重なった歴史が軸として集約される。

現在ある都市のレベルは、今後も発展を続ける場となる。

一方で、中間レベルには建物がなく、
地層の下に、現在までに積み重なった歴史や文化が埋もれており見えていない。

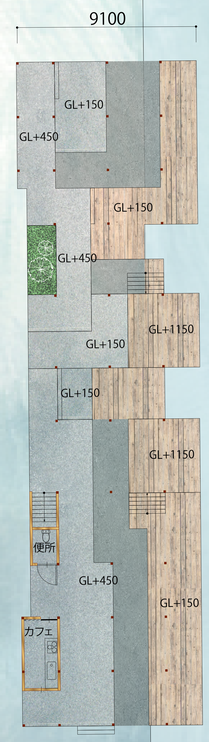
そこで、埋もれた文化や歴史を中間レベルへと引き上げ、
城下町を模した共有スペース兼シェアハウスを形成します。

また、今後も文化の拠点としての発展を促すため、
新たに「第3の居場所」というコミュニティスペースを考案した。

「第3の居場所」とは、第1の居場所である家や、
第2の居場所である学校や会社などの人間関係から離縁し、
ありのままの自分を受け入れてくれる縁結びの場としての居場所のことを指す。

今後、「文化の拠点」としてこの場が発展した後には、
水位上昇などの問題点が出てくる。

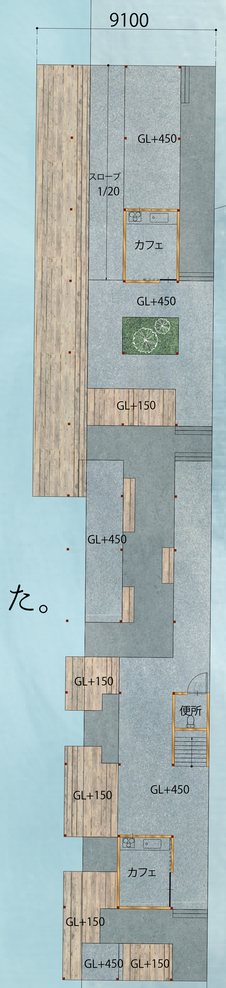
そこで高さをレベル分けした通路を考えることで、
経年による水の増水を場が変化する要素とし、
市民が残っている場同士を板材を敷いて往来するなど、
沈んだ場の上にさらに場を形成するという形態変化を考えた。



都市とは「未完の場」である。

今後も発展を続け、終着点のない場所である。
2100年の「小倉」という都市には明確な未来像が存在していない。

そこで我々は、2100年の小倉の未来像を明確にし、
今までにない都市としての提案を考えた。

この敷地は「紫川」を中心とし、左右に分かれた場所となっている。
岸を繋ぐのは約400年の歴史を持つ「長崎街道」である。

この場には、多くの歴史や文化が埋まっていると考えた。
そこで都市になるにつれて埋もれてしまった文化や歴史を再発掘し、
この場の造形に活かすことで「小倉らしさ」の詰まった年の提案を考えた。